



平和がいいな昭和区の会 自主上映会

劇場版

アナウンサーたちの戦争



森田 剛

橋本 愛 高良健吾 安田 顕

浜野謙太 大東駿介 水上恒司 藤原さくら 中島 歩 渋川清彦

眞島秀和 降谷建志 古館寛治 小日向文世

脚本：倉光泰子 音楽：堤 裕介

制作統括：新延 明 プロデューサー：城谷厚司 林 啓史 撮影：佐々木達之介 照明：水村享志 美術：山口類児

取材：網秀一郎 大久保圭祐 録音：高山幹久 音響効果：最上淳 編集：松本哲夫 映像技術：齋藤佑樹 VFX：高崎太介

美術ディレクター：川村裕一 衣装：竹林正人 ヘアメイク：山田容子 装飾：三代川昭彦 持ち道具：小澤友香

制作担当：蓮見昌寿 助監督：長尾 楽 脚本協力：山下澄人 演出：一木正恵

2024年 | 日本 上映時間：113分 | カラー | ビスタサイズ | 5.1ch テレビ版制作著作：NHK
製作協力：NHKエンタープライズ 製作・配給：NAKACHIKA PICTURES



『平和がいいな昭和区の会』入会のお誘い

平和がいいな昭和区の会

連絡先： 池内福祉会内 Tel 052-853-3825

私たちは、現憲法が蔑ろにされ、戦争する国にされつつあることに危惧を抱き、昭和区内で志を共にできる団体、地域の方々と共同して平和を守る活動をするため「会」をつくりたいと考えました。

「全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する」（憲法「前文」より抜粋）憲法は、私たち全ての人々が、基本的人権や生存権を有すること、そして「戦争をしない暮らし」をすることを保障しています。

日本の社会は経済が停滞し、さらにコロナ禍が加わり、貧困と格差がひろがり、暮らしが大変になっています。子育て、教育の困難さが増しています。私たちは、人々の人権が尊重され、生活が成り立ち、平和のもとで暮らすことができる、憲法の理想が実現する社会を求めていきたいと思います。身边には、沖縄の事、平和や環境問題に関心をもち活動をしている高校生、若者がいます。昭和区では平和を求めて歩く「平和行進」「ともしびウォーク」そして「平和のつどい」を区民の手で継続しています。

平和がいいな昭和区の会は、経験の蓄積された年齢層から、明日の社会をつくる若者たち、日々の暮らしを営む人々等どなたでも参加できる会をめざします。多くの団体、個人の参加を呼びかけます。

平和がいいな昭和区の会 加入申込書

【名前】 _____ 団体で申込み

【住所】 _____

【電話番号】 _____ 【メールアドレス】 _____ @ _____

※年会費 _____ 円を添えて申し込みます

「平和がいいな昭和区の会」会則

第1条 名称

この会は、平和がいいな昭和区の会と称します。

第2条 目的

憲法が示す基本的人権や生存権を守り、戦争の無い社会を実現することを目的とします。

第3条 構成

本会は、目的に賛同する個人、団体で構成します

第4条 活動

本会は目的を達成するため以下の活動をすすめます。

- 1 学習活動
- 2 集会など市民へのアピール
- 3 団体交流など

第5条 総会

本会の決定機関は総会であり、通常年1回開きます。

活動のまとめと方針、予算決算の承認をします。

また、必要に応じて臨時総会を開きます。

第6条 世話人会議

運営は、世話人会議により行います。

世話人は団体の代表、及び個人で構成します。

世話人代表は世話人から選出します。

・世話人代表

・世話人若干名

第7条 本会の財政は、会費と寄付金等でまかねます。

年会費：団体 2000円

個人 500円

第8条 本会の会計年度は、毎年総会から、翌年総会までとします。

附則 本会の会則は、2022年6月12日より施行し、会則の改定は総会で行うものとします。

劇場版

アナウンサーたちの戦争

主催：平和がいいな昭和区の会 853-3825 共催：昭和区九条の会

4.17(金)午後6:30～昭和文化小劇場 1,000円



太平洋戦争では、日本軍の戦いをもう一つの戦いが支えていた。ラジオ放送による「電波戦」。ナチスのプロパガンダ戦に倣い「声の力」で戦意高揚・国威発揚を図り、偽情報で敵を混乱させた。そしてそれを行ったのは日本放送協会とそのアナウンサーたち。戦時中の彼らの活動を、事実を基に映像化して放送と戦争の知られざる関わりを描く。

国民にとって太平洋戦争はラジオの開戦ニュースで始まり玉音放送で終わつた。奇しくも両方に関わったのが天才と呼ばれた和田信賢アナ（森田剛）と新進気鋭の館野守男アナ（高良健吾）。1941年12月8日、大本営からの開戦の第一報を和田が受け、それを館野が力強く読み、国民を熱狂させた。以後、和田も館野も緒戦の勝利を力強く伝え続け国民の戦意を高揚させた。同僚アナたちは南方占領地に開設した放送局に次々と赴任し現地の日本化を進めた。和田の恩人・米良忠麿（安田顕）も「電波戦士」として前線のマニア放送局に派遣される。一方、新人女性アナウンサー



戦争を語る人がますます少なくなっている現代、本作を通してまた新しいアプローチの考察と共に、そして感動を呼び起こし、決して風化させてはいけない戦争の事実に目を向けてほしいと願い、映画化の運びとなつた本作。先人の苦悩は現代を生きる私たちにとって学びになつてゐるのか。政治経済・社会状況、そしてエンターテイメントにおいても、なお連綿と受け継がれる「不都合な眞実の隠蔽」と「不条理な大衆扇動」がまだそこにはある。本作が映画化となり、戦時における放送と戦争の知られざる関わりを通して、そこに関与する人間たちの苦悩を私たちは突き付けられるだろう。



4.17(金)午後6:30～昭和文化小劇場 1,000円